

ガラテヤ書4章12-31節 「真実な自由」

1A 真の熱心 12-20

1B 肉体の弱さ 12-16

2B 自分たちに対する熱心 17-20

2A 自由の女と奴隷の女 21-31

1B エルサレムとシナイ 21-27

2B 肉の人による迫害 28-31

本文

ガラテヤ書4章12節からの学びです。パウロは、3章からここまでガラテヤ人に対して、彼らの信じていること、行なっていることに対して強く対処してきました。3章1節の冒頭を見てください、「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」というかなり強い物言いから始めていました。普通であれば、「こんな頭ごなしの言い方はないんじゃないかねえ？」なんて反発してしまいがちですが、そういった類の問題ではないのです。福音の真理から離れてしまったという、深刻な状態を話しています。

1A 真の熱心 12-20

それで福音の教えについて、その教理について語っていましたが、12節からパウロは、彼らに対する牧会的な配慮を見せます。それは、正しいことを語っていても、それを聞き取る心が備えられているかどうかの配慮です。語っていても、真意が伝わらず誤解が広がることを懸念している言葉です。パウロは、ただ平然と真理の言葉を並べたてているのではなく、彼らを思う優しい心がここに示されています。しかし同時に、個人的なことであっても、彼らの態度がその偽りの教えによってどのように変えられてしまったかを語り始めます。今日学ぶところも、とても教会の中において現実的な話です。

1B 肉体の弱さ 12-16

12 お願いです。兄弟たち。私のようになってください。私もあなたがたのようになったのですから。あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。

パウロが、ここで「兄弟たち」という言葉を使っています。彼らが神の恵みから離れてしまったことを知っていながら、それでも兄弟として愛していることを伝えています。

そして、「私のようになってください。」と言っています。この言葉だけ読むと、やばいと感じないでしょうか？これは、パウロの意味している「自分のようになってほしい」という基準を知れば、その

意味は分かるはずですが。パウロは 4 章の最後に、キリストにあつて自由になっていることを語っています。自分が神から認められるために、様々な教えを守らなければいけないとするユダヤ主義者の言うことに、ガラテヤ人が聞いいてしまっていました。9-10 節を見てください、「9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。10 あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。」パウロはかつて、こうした律法にがんじがらめでした。しかし、キリストの福音によって彼は自由になりました。主によって与えられた律法、愛の律法に縛られていきました。かつて律法主義者であったパウロが、今は自由を得ています。それで、「私のようになってください。」と言っています。

そして、「私もあなたがたのようになったのですから。」と言っています。これはどういうことか？パウロは、信仰をもったユダヤ人として、イエス様の救いのために僕になる心備えがありました。そのことを分かり易く説明したのが、コリント第一 9 章にあります。19 節から 23 節までを読みます。「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、・・私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、・・律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みとともに受ける者となるためなのです。」

パウロは、このように自分のユダヤ人としての習慣や考え方を、福音のゆえに、魂の救いのゆえに捨て去る自由を持っていました。彼の話している自由とは、自分の肉の思いのままにする自由ではなく、神に愛をもって仕える自由であります。神に義と認められるために、律法の行ないによって認められようとしてもがんじがらめになって、むしろ罪の虜となっていた自分が、ただキリストを信じる信仰によって罪、咎が取り除かれ、その神の愛によって心の一新を経て、それでその他の自分の属性については、必ず持っていなければいけないものだと思わなくなったのです。海外宣教師であれば、これは誰もが経験します。これまでの自分の常識や価値観を服を脱ぐようにして捨てて、それでただキリストを伝えるためだけに、その中で生活します。

「あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。」という言葉も大事ですね、パウロの語調の強さに、彼の心がガラテヤ人によって傷ついているのではないか？と思われる、誤解されるかもしれません。彼らが、パウロと彼らの人間関係の問題であると誤解してしまうかもしれません。しかしパウロはもっと達観しています。というか、次元があまりにも違います。彼にとって、ガラテヤ人は自分の信仰の息子、娘のような存在です。パウロは彼らを霊的に育ててきた人です。ゆえに、

彼らが福音の真理から離れたことで、彼らのことを責めているのでは決してなく、彼らが離れてしまっていることを悲しみ、嘆いています。傷ついたという基準の話をしてしているのではないのです。

13 ご承知のとおり、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。
14 そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあったのに、あなたがたは軽蔑したり、きらったりしないで、かえって神の御使いのように、またキリスト・イエスご自身であるかのようになり、私を迎えてくれました。

パウロがここから話そうとしていることは、「恵みの福音の中にある、真実の愛と情熱」です。ユダヤ主義者らの働きはとても魅力的に見え、外見ではしっかりとしており、聖書的にも正統派にさえ見えます。自分たちの肉を誇りとしているので、人々が集まり易いです。しかし、そこに真実の愛があるのか？という問いかけなのです。

パウロは、ガラテヤ地方に赴いた時に、健康体で来たのではなく、病身のまま来たようであり、彼が病に罹ったり、体に障害を持ったという記録で思い当たることは少しあります。第一次宣教旅行で、キプロス島から小アジアのパンフリヤ地方に上陸します。その時に、マルコによる福音書のマルコが、これまで同行していたのに、一行から離れてエルサレムに戻りました(使徒 13:13)。この時に、聖書学者らによると、マラリヤか何かを患ったのではないかと、言います。そして、ピシデヤにあるアンテオケでパウロは福音説教をします。そこは標高 1000 呎以上であり、パウロの一行は険しい旅をした後でした。この時点でパウロの体が弱まっていた可能性があります。

さらにパウロは、イコニウムに行き、それからルステラに行きます。そこは福音が受け入れられたのですが、なんと自分とバルナバをギリシヤの神々としていけにえをささげようとしてしましました。それで彼らはそれを制止しました。ところが、アンテオケとイコニウムで福音を拒んだユダヤ人たちがやって来て彼らを煽るので、群衆はパウロを石打ちにしました。死んでしまったものだと思われましたが、弟子たちが見つめているとパウロは立ち上がって、なんと再び町の中に入って福音を伝えたのです。この死にかけているような状態で何が起こったかについて、コリント第二 12 章にある、第三の天に引き上げられた経験なのではないか？という推測があります。そこで自分が高ぶらないように、主がサタンによる「肉体の棘」を許されたことを述べています。目を覚ますと、石打ちによる傷で体が酷く痛んでいたのではないかと、思われます。三度取り除いてくださるように主に祈ったら、「わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と主は言われ、それで彼は、「私が弱いときこそ、私は強いからです。」と告白したのです。このような形で、ガラテヤ地方にいる時は、病身であり、また石打ちによる負傷があったのではないかと、思われるのです。

ですから、パウロが福音を語っている時は、そのような病身から語られているのですから、魅力には激しく乏しかったのです。コリント第二において、教会の中にいる一部、分派的な輩がこう言っていました。「10:10 パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ったばあいの彼は弱々しく、

その話しぶりは、なっていない。」いかがでしょうか、私たちが福音の真理に立っていない時には、必ず枝葉末節の議論が出てきます。「あの人の説教はすばらしい」また「すばしくない」と言っている時に、その内容ではなく見かけであったり、自分のことを肯定してくれたとか、あるいは、その反対に身下す時に、見た目による判断をします。

しかし、福音の真理に触れた場合はそんな反応はしません。「かえって神の御使いのように、またキリスト・イエスご自身であるかのように、私を迎えてくれました。」とここにあります。異邦人がキリストを知る時に、行き過ぎることがあるでしょう。相手を敬うがあまりに、先ほどのルステラにいる人々のように、神々に祭り上げることもありました。ローマの百人隊長コルネリオでさえ、その過ちを犯しました。「使徒 10:25-26 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝んだ。するとペテロは彼を起こして、「お立ちなさい。私もひとりの人間です。」と言った。」ですから、異邦人は神々を拝んでいたために、相手への敬意において過ちは犯しますが、それでも、純粋な思いから出ていることは確かです。ガラテヤの人々が福音の真理に触れて、それでパウロを神の御使いか、イエス・キリストご自身のようにして慕って、敬っていたことは確かなのです。これが、福音に触れて心が変わられて、へりくだり、また愛と喜びに満ちている姿であります。

15 それなのに、あなたがたのあの喜びは、今どこにあるのですか。私はあなたがたのためにあかししますが、あなたがたは、もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思ったではありませんか。

ここですね、人が福音ではなく、他の何かに依拠していく時に、真実な喜びがその人から消えます。その語っていることは尤もに聞こえるかもしれませんが、けれども、はっきり分かるのは、その人に喜びが無くなっていくことです。ガラテヤの人々は、見た目は良くなったのかもしれませんが、喜びがそこに無くなってしまいました。これが聖霊による実があるかどうか、真実の信仰なのかどうかを試されるところです。聖霊の実は愛であり、そして喜び、平安などによってその愛が表れます。

以前は、「もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思ったではありませんか」ということです。パウロの肉体に試練があるということは、具体的には、目に煩いを持っていたようです。この手紙の最後に、「私は今こんな大きな字で、自分のこの手であなたがたに書いています。(6:11)」と言っています。口述筆記の手紙なのですが、自分の署名を入れて真実なものであることを示すために書いたのですが、大きな字で書かないといけないくらい目が見えなかったようです。しかし、そのような欠点に見えるようなことでさえ、当時のガラテヤ人は自分の目を与えたいと思ったという愛情があったのです。

16 それでは、私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。

ガラテヤ人は、今は、パウロを敵視しています。このように態度が変わってしまったことについて、

ガラテヤ人はパウロについて、ユダヤ主義の教師からいろいろなことを吹き込まれていたと思います。それを、鵜呑みにしました。それでパウロの意図していること、その真意は別のところにあります。真理を語っているのです。しかし、その言葉を相手を攻撃していると受けとめるようにしか聞こえない、またそのように聞くような心の状態にさせられています。

パウロは、コリントの教会でも一部の偽教師たちがいたので、コリントの人たちが影響を受けていた時に、同じことを話しました。「2コリント 6:11-13 コリントの人たち。私たちはあなたがたに包み隠すことなく話しました。私たちの心は広く開かれています。あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。」

2B 自分たちに対する熱心 17-20

17 あなたがたに対するあの人々の熱心は正しいものではありません。彼らはあなたがたを自分たちに熱心にならせようとして、あなたがたを福音の恵みから締め出そうとしているのです。18 良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良いものです。それは私があなたがたといっしょにいるときだけではありません。

「熱心」がどこから来ているのか？という問いかけはとても大切です。ここにあるように、ユダヤ主義者らはガラテヤの人たちに、熱心さや愛情をもって接していました。ところが、それがキリストに彼らを結びつけるところの熱心さではなく、自分たちに対して熱心にさせようとしていたという大きな問題があります。熱心であるからといって、それが御霊から出てくる、神から出ているものではないのです。むしろ、自分を愛して、自分が愛されるために、自分に引き寄せるということを行っています。これは異端やカルトの典型的な手法で、しばしば、「ラブ・シャワー」と呼ばれます。愛のシャワーを新来者に対して浴びせます。このことによって、後にその組織の規則にがんじがらめにして、奴隷状態にするための手段にしか過ぎないのです。けれども、この心の動きは、いつでも起こります。福音の恵みから締め出されてしまうと、そこにある自分は神の愛に枯渇した魂のみです。ですから、何とかして人々の注意、人々の財力や気力、体力までを自分がすいとることによって、支配欲を表します。

「良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良い」とパウロは言っていますが、これは柔らかく言っています。熱心そのものが悪いのではなく、良いことで熱心になるということです。福音の言葉にあるキリストの愛に駆り立てられて熱心になることはとても良いことです。熱心さを全て否定してしまう反動も、キリスト教会にはあります。何をもって熱心なのか、ということさえ吟味していれば、主に対して熱心に仕えることは喜ばしいことです。そして、「それは私があなたがたといっしょにいるときだけでは」と言っています。パウロと一緒にいる時は真実な愛情があったのに、パウロに来た後の者たちによってその喜びが締め出されてしまった、ということのパウロは指摘しています。指導者がいる時は、しばし主と共に歩んでいるようにしていながら、指導者がいなくなるなる

と、途端に別の行動を取るということが起こっている時、自分が福音の真理に従って歩んでいるのかを吟味する必要がありますね。

19 私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

ここにパウロの正直な気持ちが表れています。まず、パウロが、彼らが福音の中に生きることについて、「産みの痛み」という言葉を使っていることに注目してください。事実、福音を信じて、その中で生き、また歩いていくためには、母親が子に対して養い育て、父のように権威をもって教育するような、育てる要素が非常に強くなっています。テサロニケ人への手紙第一には、そのことが詳しく書かれていて、使徒たちが母のように優しく養い育て、父のように権威をもって勧め、慰め、厳かに命じたと言っています(2章)。それから、テサロニケの人たちが「誘惑者があなたがたを誘惑をして、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけない」と思ったことを、パウロは述懐しています(3:5)。そうです、育った子どもが成長しても、そこから離れてしまうということは、肉の両親においてもしばしばあることです。育てるのには時間がかかっても、失敗してしまうのは瞬間の出来事です。

そしてここで、「再びあなたがたのために産みの苦しみを」していると言っています。これは、中途半端なことではありません。彼らが救われているかどうかという話ではなく、もう一度、救われていないという前提で福音を語らなければいけません。初めからやり直したということです。事実、パウロに対して敵対している人々の中には、信者であるとされながら、あるいは働き人と言いながら、救われていないのではないかとと思われる人々がいました。初めから点検する必要がある、という生々しい霊的現実があるのです。同じ問題を持っていたコリントの教会に対しても、パウロは、「あなたがたは信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。(2コリント13:5)」と言いました。

20 それで、今あなたがたといっしょにいたことができたなら、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。

パウロ自身が、このような強い語調になっている事態にまで発展していることを悩んでいます。彼自身がどうすればよいか分からず、困っています。これは福音宣教の奉仕者、主に仕える者たちみなが共有する課題です。どうすればよいか、困る。解答が見いだせないのです。

2A 自由の女と奴隷の女 21-31

パウロは少し取り直して、新たに聖書から彼らの過ちを論じます。

1B エルサレムとシナイ 21-27

21 律法の下にいたいと思う人たちは、私に教えてください。あなたがたは律法の言うことを聞かないのですか。22 そこには、アブラハムにふたりの子があって、ひとりには女奴隷から、ひとりには自由の女から生まれた、と書かれています。23 女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれたのです。

ユダヤ主義者やガラテヤ人は、律法について詳しく論じていました。けれども、テモテへの第一の手紙にも出てきますが、「1:7 律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。」ということが起こります。聖書についての細部をいろいろ論じることはできるのです。けれども、実は律法そのものの役割とか働きを、大観して、把握しているということではないのです。パウロこそが、律法に精通していた人でした。そしてキリストに出会い、律法がこの方であって完成したことを知りました。ゆえに、彼こそが律法について論じるに値する人だと言って良いでしょう。

そしてパウロは、彼らの誇るユダヤ人の父祖アブラハムを取り上げます。3章6節からずっと、アブラハムの生涯から福音を論じていますが、その続きと言ってよいでしょう。この話はもちろん、アブラハムの妻であるサラ、そして女奴隷であるハガルの話です。その身分はもちろんサラは自由人、そしてハガルは奴隷です。

そこから、ハガルから生まれたイシュマエルについて話します。これは、アブラハムから子孫が生まれるという神の約束を、自分たちの肉の努力によって実現させようとした試みの結果として生まれてきた子であります。しかし、イシュマエルが13歳になった時に主がアブラハムに現れて、サラから生まれる子が彼の子孫であるという約束をなさいました。そしてイサクが生まれました。イサクが乳離れする日をお祝いしている時に、イシュマエルはイサクをからかいました。それでサラが、ハガルもイシュマエルも家から追い出すようにアブラハムに願います。それで二人はアブラハムの家から出ていきました。こうやって、神の約束を信じて生まれてきた子が、御霊による子であり、自由人として神の相続を得ることができます。そして肉の努力によって生まれてきたものは、やはり肉であり、依然として奴隷状態にあるということです。

この現実には、創世記を読むと良く分かります。主がアブラハムにイサクを全焼のいけにえとして捧げるように命じられた時に、「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。(創世 22:2)」と言われました。イシュマエルがいるのに、その子はひとりに数えられていませんでした。この現実があります。つまり肉の努力は、決して神に喜ばれることはないのです。そして肉の努力は、全く努力していない時と変わらずに、未だ奴隷状態であるということです。神のものを受け継ぐには、どうしても信仰によって神に近づくという行為が必要なのです。

24 このことには比喩があります。この女たちは二つの契約です。一つはシナイ山から出ており、

奴隷となる子を産みます。その女はハガルです。25 このハガルは、アラビアにあるシナイ山のこと、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。26 しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。

「比喩があります」とパウロは言っています。ユダヤ人の中には、聖書に対していくつかの方法があり、その一つはミドラシュというものがありました。それは、聖書の書かれていることは歴史的事実であり、それが第一であるけれども、神の教えを教えるための霊的な真理でもあるという読み方です。この読み方は妥当性がありますが、第一に歴史的な事実として読んでいくことが大切であり、新約聖書において神の真理に照らしてようやく、霊的な原則を読みこむことが可能になります。ですから、比喩的な解釈は慎重でなければいけません。

サラとハガルは、二つの契約、すなわち新しい契約と古い契約を代表しているとパウロは言います。古い契約はシナイ山から出ました。そしてシナイ山から出た契約とその律法は、人々をハガルのように奴隷のままにしておきます。つまり、罪から解放されることはないと教えます。そしてパウロは現代のユダヤ人の社会に当てはめます。それは、アラビアにあったシナイ山は、「今はエルサレムに当たる」と言っています。この意味するところは、その物理的な神殿礼拝が、肉によって律法を守ろうとしている試みに他ならなかったのです。人々をがんじがらめにしていますが、その規則の奴隷となっても、心にある罪や肉の欲望に対してなんら効き目がないのです。

けれども、サラは新しい契約を表していました。そして、シナイ山と対比してエルサレムを山として持っています。しかし、そのエルサレムは地上にあるエルサレムではなく、天からのエルサレムであります。それが書かれているのは、黙示録 21 章です。「21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。」イエス様もこのことをニコデモに語られました。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)」と言われましたが、「上から生まれなければ」と訳すことができます。天から、上から生まれることによって、神の国を相続することができるのです。

27 すなわち、こう書いてあります。「喜べ。子を産まない不妊の女よ。声をあげて呼ばわれ。産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の産む子どもは、夫のある女の産む子どもよりも多い。」

これはイザヤ書 54 章 1 節からの引用です。エルサレムが破壊されて久しくなって、他の異邦の諸国が栄えていたとしても、終わりには彼女は多くの子孫を宿すという約束です。主が再臨されたあとの、神の国におけるエルサレムの地位を預言したものです。

けれども、ここではこれを霊的原則として取り扱っています。すなわち、御霊によって始まった者たちは、今現在は、不妊の女のように見なされるということです。なかなか見た目には、実が結ば

れていると感じられないということです。パウロが肉体に試練を持っていて、彼らの信仰にも試みになるのではないかと思われたのですが、そのように人々には不妊の女のように見られる部分があるということです。ですから、みすぼらしさが一見、福音の中に生きることにおいて存在します。

しかし、本当に実を結ぶのは、御霊に留まることなのです。多くの肉によって生み出した事柄は、その実質的な実を見て、恥じ入ることになります。どこに実質があり、命があったのかと言えば、そのみすぼらしく見えるようなところにあったということです。何も変わらない福音の中にありました。ところが、福音ではないところに他の活路を見いだしてそれを成し遂げても、一時的は多くの実を結んでいるように見えますが、実はそうではないということです。

2B 肉の人による迫害 28-31

28 兄弟たちよ。あなたがたはイサクのように約束の子どもです。

ガラテヤの人たちを、再び「兄弟たちよ。」と確認しています。そして、「イサクのように約束の子ども」だと言っています。異邦人であっても、キリストにある神の約束が異邦人の彼らにも広げられました。信仰によって、アブラハムの子孫になるとことができます。そして、イサクと同じように、血縁関係ではなく約束にしたがって、相続の子となったのです。

29 しかし、かつて肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりです。30 しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。」

これはとても大切な原則です。肉によって神の言われることを行なおうとしている者は、必ず御霊によって生きている人々を迫害するということです。イシュマエルがイサクをからかいましたが、それが聖書全体でも、信仰によって生きる人と肉によって生きる人の確執となって出てきます。弟アベルに対して、兄カインが妬んだところに表れています。サウルが神に愛され、選ばれたダビデを妬んで、殺そうとしたところにも表れています。そして、数々の預言者がその目にあい、主ご自身が宗教指導者によって殺されたというところまでに至ります。私たちが学んでいるエレミヤ書のエレミヤも同じように偽預言者や祭司らに迫害されました。どんなに肉に拠って良い物に見せたとしても、結局のところ御霊による働きに、猛烈に反抗するのです。

けれども、ここに書かれているように、相続をすることは自由な子、約束の子のみなのです。ですから、ダビデが神の約束を結局は相続したように、そしてサウルが退けられたように、自由な子は反対を受け、迫害を受けても必ず約束のものを受け継ぎます。ですから、信仰によって忍耐することが大事です。自分がたとえみすぼらしく見えても、じつくりと主を待つことが大事です。そして御霊に頼り、神に忠実に仕える、主の言われることを行なうことが大事です。

31 こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子どもではなく、自由の女の子どもです。

パウロはガラテヤ人にこのように、結論をつけています。今、新たに再び、産みの苦しみをしているのです。彼らが信仰の初めに戻るようにさせていると言って良いでしょう。律法によって生きることが、奴隷なのだということをはっきりさせました。そして信仰によって生きるとは、ユダヤ人の原点、すなわちエジプトの奴隷状態から自由にされる、その本質を生きることであることを示しています。次回、その奴隷状態に戻ることがないように、信仰に留まるよう強く勧めているところから始まります。